

チームで推進する授業研究の研修プログラムの事例研究

A Case Study on Training Program for Promoting Team Work in Lesson Study

望月 紫帆*

西之園 晴夫*

坪井 良夫**

Shiho MOCHIZUKI Haruo NISHINOSONO Yoshio TSUBOI

特定非営利活動法人学習開発研究所*

京都市教育委員会**

NPO Institute for Learning Development

Kyoto-city Board of Education

〈あらまし〉 京都市では中学校の若手教員の研修において、チームで取り組む授業研究を採用している。チームで授業を設計するプロセスに焦点をあてて、授業研究のテーマと授業設計の方法との関係を分析したところ、テーマの存在やそれが提示されるタイミング、そして共有の方法によって、メンバーの授業設計への関わり方や、授業者の挑戦意欲の変化などが確認できた。

〈キーワード〉 授業研究，教員研修，チーム，授業設計

1. 本報告の背景と目的

第74回中央教育審議会(平成23年1月31日)で提示された「教員の資質能力向上 特別部会」の審議経過報告書「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策」には、教職生活の全体を通じた自発的かつ不断に資質能力を高めることへの期待が示されており、大量退職により増加する若手教員に求められる資質のひとつとしてチームで対応する力を期待している。

京都市は若手教員養成のための5カ年計画を打ち出しており、若手教員の力を活かした組織的な資質向上のための取り組みの実現を目指している。筆者らは初任者研修および2・3年目研修のプログラムを共同開発した。本報告では、そのうちの2・3年目の研修に関するものであり、チームで取り組む授業研究の分析結果から、効果的な授業研究の在り方を考察する。

2. 実践の概要と本報告のテーマ

京都市が構想する中学校採用2・3年目教員研修では、採用2・3年目の教員が、同じ教科を担当する市内の他の中学校の教員とチームを組み、協働で授業研究を行う方法を採用している(図1)。全チームメンバーが必ず一回は授業を担当することになっており、担当する役割は毎回異なる。このようにすることで、授業者が準備を一人で担い、一方的にフィードバックを受ける授業研究ではなく、チームで授業を開発し、実態を分析し、修正した指導案を公開するといった開かれた授業研究を目指しているが、実際に授業研究が深まっているかどうかは明らかではない。

本研究では、チームでの協議や授業設計の方略に焦点を当てて、このような方法で授業研究を行った場合にあるチームがどのように変化するかを追求する。それにより、チームでの授業設計を支援する方法を検討する。

	運営 教諭Ⅰ	報告 教諭Ⅱ	総括 教諭Ⅲ	運営 教諭Ⅳ	報告 教諭Ⅴ
第1回	授業者	指導案B	観察者	指導案A	観察者
第2回	観察者	授業者	指導案B	観察者	指導案A
第3回	指導案A	観察者	授業者	指導案B	観察者
第4回	観察者	指導案A	観察者	授業者	指導案B
第5回	指導案B	観察者	指導案A	観察者	授業者

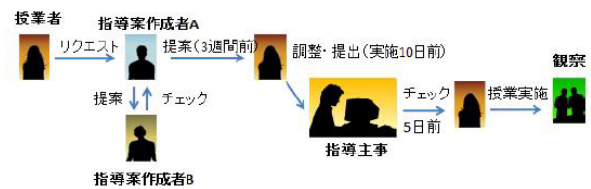


図1 チームの構成と授業設計の流れ

3. 研究の対象と方法

2・3年目教員のチームから異なる教科の1チームを選び、研究授業を終えた後の協議会で、許可を得てビデオカメラで記録をとりそこでおこる言動をパターン化した。

(2010年9月から2011年2月まで参加)

4. 結果

4-1 授業者がテーマを提示するタイミング

今回のチームでの取り組み方は、指導案を提案するメンバーと授業者とが異なる。そのため、設計の意図の十分な交流が必要とされるが、これらに課題がみられる。

表1 あるチームのテーマと授業設計の方略

	1回目	3回目	4回目	5回目
授業者	教諭Ⅰ	教諭Ⅲ	教諭Ⅳ	教諭Ⅴ
提案者	教諭Ⅱ	教諭Ⅴ	教諭Ⅰ	全員(予定では教諭Ⅳ)
最初のテーマ	グループ学習 電子黒板	・深く読んでほしい ・解答の示し方は適切か	子どもたちを動かしながら読みを深めるには	グループ学習に適した課題とは
授業設計の方略	提案者の指導案を授業者がほぼ全て書き換える	提案者の指導案を一部授業者が書き換える	3回目の最後に授業者が提案者にテーマの変更を告げ、それに応じた提案がなされる	4回目の最後に授業者の関心に応じて全員で設計の方向性を定める
協議中に浮上するテーマ	グループ学習, 電子黒板, 気づきがおこるワークシート	グループ学習に適した課題とは, グループ学習で生徒の気づきを拾うには	グループ内の一部の回答に押し通されず, よい気付きをすくいあげるには	主体性の促進と統制のバランス, グループ内・グループ間で比較し根拠を説明する

※2回目データなし

1回目は、協議会の前にテーマが提示されていなかったため、最終的に授業者によって大幅に書き換えられた指導案が使用されていた。4回目は協議会直後に直接授業者と提案者が相談し、テーマを変更した際もそれに対する指導案が提案されている。さらに5回目は、協議中にテーマが示され、全員で授業について考えていた。

これにより、テーマの提示のタイミングは、指導案作成の連携の在り方に影響を与えることがわかった。

そこで注文住宅の建築をメタファーとして「リクエストシート」を導入し、授業者が望む授業を提案者に伝える注文書として利用した。

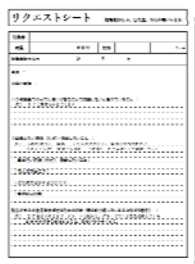


図2 リクエストシート

4-2 チームのテーマの構築

協議の最初に、授業者のテーマが提示されるが、協議がすすむとメンバーそれぞれの関心を踏まえた新たなテーマが浮上する。1回目の協議で取り上げられている「グループ学習」というキーワードは、最後まで引き継がれている。また、3回目の協議で浮上した「グループ学習に適した課題」という視点は、5回目にも引き継がれ、これらが徐々にチームのテーマへと進展している。同時に、授業の設計方法も変化している。

3回目の研究協議会が終わると、この協議を受けて次の授業担当者が本当に組みたいことをテーマにするようになった。さらにこの影響を受けて、5回目の授業担当者も、組みたい授業をメンバーに話し、他のメンバーが挑戦をリクエストしたりしながら共に授業のテーマを考え

ている様子がみられた。このように、チームのテーマが形成される中で、チームで新たな授業に挑戦しようとする姿がみられた。

5. 結論と今後の課題

以上のことからつぎのように結論づける。

- ① 授業者が設計の意図を意識して授業を行うためにはテーマをもつことが重要であるが、チームで連携して授業を設計する場合に、メンバーがテーマをふまえて提案するためにも、授業者のテーマを設計段階で提示し、提案者と交流しておく必要がある。このことから、リクエストシートの導入を研修プログラムの一部に位置づける。
- ② 個人のテーマについて協議を通して深めることができると、チーム全体で授業設計を行うようになった。したがってチームで暫定的にテーマを決めて、さらに個人の小テーマを設定すると、1人のメンバーの授業を設計することへの他のメンバーの関心がさらに高まり、お互いが支え合う研究協議会が構築されやすくなることが推測できる。

今回はチームでの授業設計の段階に焦点を当てて授業研究の在り方を事例から考察した。さらに事例を加えるとともに、チームで授業分析をする段階に焦点をあてた研究を計画する。

参考文献・URL

教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策（審議経過報告）平成23年1月31日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo11/sonota/_icsFiles/afieldfile/2011/02/16/1301982_1.pdf
 (2011/7アクセス)

西之園晴夫(2011)『教える授業から学ぶ授業への改革と活動参加型教員研修の開発』「教員を育て磨く専門誌【シナプス】6月号」ジヤース教育新社, pp.30-33